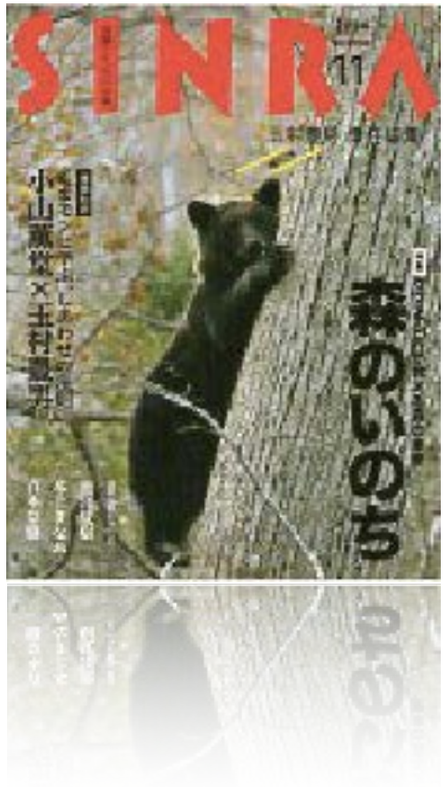
シンラの旅-2「秋田」

マタギの里へ



エッセイ

芦原 伸

SINRA

CONTENTS

各見出しリンク

SINRA-1 2014.9
「小豆島」オリーブカントリー

SINRA-2 2014.11
「秋田」マタギの里へ

SINRA-3 2015.1
「富岡」富岡製糸場の歩き方

SINRA-4 2015.3
「北海道」北海道ワイン紀行

SINRA-5 2015.5
「小笠原」黒潮の孤島鵜来島漂流

SINRA-6 2015.7
「大台ケ原」熊野古道をいく

SINRA-7 2015.9
「信州木曽谷」森林鉄道が消えた日

SINRA-8 2015.11
「霊峰月山」死と再生の小宇宙

SINRA-9 2016.1
「丹後」古代王国と、絹をめぐる道

SINRA-10 2015.3
「秩父」絶滅危惧種再生へ、開ける道

SINRA-11 2016.5
「佐賀」大海を越えた胡蝶の夢

SINRA-12 2016.7
「津軽」ブラキストン幻の海

SINRA-13 2016.9
「五島列島」クジラたちの海

SINRA-14 2016.11
「飯田」天空の里、遠山郷

SINRA-15 2017.1
「北海道」ジンギスカンをめぐる冒険

SINRA-16 2017.3
「宮城県」猫たちの聖地

SINRA-17 2017.5
「京都」神が授けた、いのちの水

SINRA-18 2017.7
「熊楠」の森をめぐる冒険

SINRA-19 2017.9
「カナダ」極北の大地に生命が燃える

SINRA-20 2017.11
「宮崎」神楽仮面の謎を探る

ご購入 Fujisan.co.jp

ご購入 amazon.co.jp プライム

SINRAの旅

伝説の阿仁

秋田マタギの里へ

トンネルをくぐると、そこはマタギの里であった——。

阿仁（あに）マタギ発祥の地として知られ、独特の風習と信仰をもつ北秋田市阿仁地区。そこでは自然を畏（おそ）れ、山の神を敬いながら、森と共生する文化と伝統が受け継がれてきた。マタギとはいったいどんな人々だったのだろうか？彼らのルーツを求めて、マタギの里を訪れた。

文／芦原 伸　撮影／戸川 覚
協力／秋田県・秋田地域振興局

国道105号と根子（ねっこ）集落をつなぐ根子トンネル。延長575.8m。1975年に開通するまで、人々は歩いて山を越えたという

TOP

Special Feature
伝説の阿仁
秋田マタギの里へ

古代狩猟民の原形を「秋田マタギ」にみた

マタギとは何ものか

——マタギは東北人およびアイヌの語で、猟人のことであるが、奥羽の山村には別に小さな部落をなして、狩猟本位の古風な生活をしている者にこの名がある。

柳田國男『山の人生』より

奥羽山脈の西翼をなす森吉山（1454m）の麓に阿仁地区（現・北秋田市）がある。根子、打当、比立内の三つの集落は昔から「阿仁マタギ」の里として知られてきた。

マタギとは熊や鹿などの狩猟を専業とした人々で、古くは「山立」と呼ばれた。語源については、その「やまだち」の音が訛ったというもの、山を「またぐ」から。マタウンパというアイヌ語から由来した、と諸説ある。

青森県、岩手県など東北地方一帯にマタギ集落は多いが、なかでも阿仁は今に残るマタギのブランド地区といってよい。秋田マタギという時は、阿仁を指すことがほとんどだ。

マタギが現代のハンターと異なるのは、趣味やスポーツではなく、集団で狩猟に関する宗教観や殺生に対する倫理観をもっていたことだ。熊は山神様の授かりものであり、入山前には水垢離をして身を清め、狩猟中には日常語（里言葉）は使わず、サジトル（死ぬこと）、イタズ（熊）、テキャシ（手袋）、ケラ（カモシカ）などの隠語（山言葉）を用い、捕獲時には「ケボカイ（解体）」という神への感謝の儀式を忘れなかった。シカリと呼ばれる頭領は絶対的存在で、獲物の肉、内臓、血液、毛皮、骨、脂肪などを切り分け、すべて平等に仲間たちに分配した。

マタギという聞きなれない言葉が突然、現代に浮上したのはソチ五輪ではなかったか？　バイアスロン競技の日本人選手のなかで最優秀だった鈴木芙由子（25）は北秋田市出身だった。バイアスロンはクロスカントリーの滑走力と正確な射撃力が試される競技だが、その勝因をきかれ、

「伝統的なマタギだった祖父の血ではないか」

鈴木はインタビューに平然と答え、周囲を驚かせた。

祖父は70歳まで雪山で猟銃を携えてケモノを追い、3年前に亡くなった。鈴木はその伝統マタギの孫娘だったのだ。

阿仁地区には戦前まで数百人のマタギがいた。ブナの原生林に取り囲まれ、半年雪に閉ざされるなかで独特の狩猟文化が生まれた。マタギとはどんな人々だったのだろうか？

阿仁マタギの里へ

東北新幹線で角館へ。角館から秋田内陸縦貫鉄道（以下、内陸線）に乗る。内陸線は、一両だけの列車が田んぼの傍らや渓流に沿ってのんびりと走る東北地方の典型的なローカル線だ。角館からは、屋敷森の点在する仙北平野を北上し、長い十二段トンネルを抜けると、阿仁マタギ駅に着く。

マタギが駅名になっているとは何とも愉快ではないか？　付近には「マタギの湯」という温泉や熊牧場などの観光地がある。マタギの名は今や観光と直結しているようだ。

駅から歩くと、打当川に沿って素朴な里山が広がった。耕地はいずれも狭く、両側から峻険な山々が迫る辺境の地である。

現役マタギの鈴木英雄さん（67）に会った。

鈴木さんは1947（昭和22）年生まれ。打当で九代続くマタギの家系で、最後のシカリといわれた鈴木辰五郎さんの孫である。

「小学生のときのウサギ狩りが初めてだった。家の玄関には村田銃がおかれ、囲炉裏端にはマタギたちが集まり、大勢で酒を飲み、賑やかだった。解体された熊の血だらけの毛皮が土間に干されていた」

祖父の辰五郎さんは明治生まれ、〝空気投げの辰〟の異名があった。43（昭和18）年、鹿角に呼ばれて熊狩りに出かけた折、雪の尾根で熊に出くわし襲われた。その時とっさに身をかわし、熊を谷底に突き落として射止めた。手を触れずに投げたのでその名がついた。その後、70歳になってからも雪男探検に呼ばれ、ヒマラヤ遠征に参加している。生涯で300頭の熊を撃ったという伝説のマタギだった。

英雄さんは15歳で学生服を着たままセッコ（勢子）となり、大人たちの狩りの仲間入りをした。学校から帰ると、先輩たちとクラ（猟場）を歩き回わり、熊のねぐらを捜した。冬眠している熊を見つけると、祖父に伝えた。

「セッコは7～8人。ブッパ（射撃手）は2人。春熊が一番捕れた。昔は栗をもって歩いた。腹が減ったら栗をかじりながら歩くと元気が出た。当時はカケス（カラスの類）が多くいてね、稲架のコメをついばむんで、罠かけてたくさん捕ったもんだ。そういえばカケスはもういなくなったなぁ」

根子トンネル展望台から望む、集落の全景。「森とともに暮らす村」として「にほんの里100選」にも選ばれている

捕った熊は胆（胆嚢）が生命線だった。「熊の胆一匁、金一匁」といわれ高値だった。乾燥させたものを削って舐めると胃腸に効き、鎮静剤ともなった。一頭捕れると家族が一年暮らせた。打当集落は40戸しかなく、マタギは20人が限界だった。次男、三男は薬売りとなって各地へ行商に出た。

「狩猟が専業だったのは戦後まもなくまでだ。バンドリ（ムササビ）やウサギの皮が襟巻になって売れた。高度成長が始まり、父親の代から出稼ぎが始まって、その後みんないなくなった」

英雄さんは高校に進学せず、祖父のマタギ仕事を手伝った。65（昭和40）年頃から法律が変わり、熊の捕獲が制限された。猟期は秋から春なので、夏は小さな田畑を営むという兼業農家である。獲物は熊からやがてヤマドリが主体となった。祖父と二人のマタギでは生活が苦しくなり、英雄さんは地元の森林組合に勤め、20年間働いた。

「今はマタギは猟友会となり6人いるだけだ。平均年齢は70歳。若い人はいない」

桃源郷のようだった根子集落

根子集落は内陸線の阿仁マタギ駅から4駅先の笑内駅で下車。駅から徒歩15分くらいのところにある。トンネルを抜けると、眼前

熊は山神様からの授かりもの
マタギは感謝の儀式を忘れない

にすり鉢のような谷間が広がり、根子川に沿って民家が点在する。75（昭和50）年にトンネルができる以前は山を越えねばならず、根子は長らく隔絶された集落だった。ランプ生活が昭和初期まで続き、自動車が入ったのは39（昭和14）年頃だった。

根子は秋田マタギ発祥の地といわれる。

――山ひとつ越えると根子という部落があった。この村はみな、マタギという冬狩りをする猟人の家が軒を連ねている。このマタギの頭の家には、古くから伝えられる巻物を秘蔵している。

菅江真澄『みかべのよろい』より

菅江真澄は江戸時代後期の人で、秋田県の地誌を書くために方々を訪ね歩いている。ここ根子集落にも足跡は及んでいる。

「菅江真澄滞在の家」という記念碑が建つ佐藤哲也さん（72）の家を訪ねた。

「家の資料や系図は明治時代、火災で焼けてしまいましたが、代々この家は源義経の家来だった佐藤継信の家系だと伝わっています。根子には平家の落人伝説もあり、源平が共存している落人村は全国でも珍しいときいています。戊辰戦争では阿仁マタギが久保田藩（秋田藩）の応援に駆けつけています」

マタギという特殊な名称から古代狩猟民族の後裔という特殊な集団のようなイメージを受ける。だがその歴史は古く、平安時代に清和天皇から全国の山で狩猟を許可するという「山立根本之巻」を授かった特権階級でもあったようだ。秋田マタギは、日光権現の山岳宗教の影響も受けているらしい。

根子番楽保存会元会長の佐藤二朗さん（86）は、

「江戸時代は久保田藩の許可を得て狩猟をしており、熊の胆を献上していました。明治時代には村に8軒の薬問屋があり、60～70人の薬売りが働いていました。薬売りは全国を歩いたので、情報が集まったのです。わが家では昭和の初めにナメコの缶詰工場を経営していました。細々と財を作り、子女の教育に資金を注いだ、というのが根子衆の生き方です」

根子番楽は根子集落に伝わる勇壮な踊りで、国の重要無形民俗文化財となっている。番楽は山伏神楽の流れをくみ、荒っぽい武士舞いが特徴。民俗学者の折口信夫は、根子番楽を次のように評している。

――村人は源平落人の子孫と称し、古来弓矢に長じ狩猟を生活としてきただけに、ここの番楽は

根子山神社に祀られた「山神様」のご神体。容姿が醜く嫉妬深いため、女が山に入ることを嫌ったという。マタギは、山神様より醜い「オコゼ」を携えることで、神を喜ばせ、山の恵みを授かったといわれる